

揺れる金正恩唯一独裁体制 ～孤立と粛清の四年を振り返る～

石丸 次郎

朝鮮半島における経済と政治研究班委嘱研究員
アジア・プレス大阪事務所代表

はじめに

2011年12月に金正日^{キムジョンイル}が急死し、北朝鮮では金正恩^{キムジョンウン}時代の幕が上がった。金正恩は1983年1月生まれだとする説が有力だ。だとするとこの時弱冠28歳。経済、軍事、外交、労働党党務をはじめとする政治など、あらゆる分野で何も実績はなく、北朝鮮体制の世襲後継が順調に進むとは考えにくかった。案の定、権力中枢では張成沢^{チャンソンテク}ら側近や高級幹部の粛清が相次ぐなど混乱が続いている。韓国政府は四年足らずの間に100人を超える幹部が粛清されたものと推計している。また、2013年2月、2016年1月の二度の核実験強行によって、最大の外交的、経済的支援国であった中国との関係を悪化させ、むしろ中国を敵対する韓国の方に押し出すなど、国際的孤立を深めた。粛清の多発など、権力中枢が安定しない理由は、①絶対指導者たる金正日の死によって権力内の勢力均衡が乱れたこと②金正恩による唯一独裁システムの確立を無理に推進させていること③金正恩の個人的資質、にあると考える。本稿では、金正恩時代の四年を振り返り、度重なる中枢での幹部粛清を中心に金正恩体制の揺らぎについて考察する。

第一章 金正恩体制をどう見るか

第一節 矛盾を抱えて出発した金正恩体制

2010年9月に開催された第三回朝鮮労働党代表者会で、金正恩は初めて公式に姿を現し、党中央軍事委員会副委員長などの地位に就いた。この時発表された人事では、金正日の妹の金慶姫^{キムキョンヒ}、その夫の張成沢^{チャンソンテク}、崔龍海^{チュリョンヘ}、そして李英鎬^{リヨンホ}らが、長老大物の党・軍幹部を差し置いて抜擢されて権力の核心に配置された。彼らは、金正日にもっとも忠実な側近であり、その任務は、健康悪化で執務をまっとうできない金正日を支えながら、金正恩によるポスト金正日体制を作り上げていくことであったのは間違いないだろう。

2008年夏に倒れて以来、深刻な健康問題を抱えていた金正日にとっての最重要事は、金日成^{キムイルソン} - 金正日の時代に完成を見た「唯一領導体系」=唯一独裁システムを、金正恩による統治にも

つつがなく移行させ、かつ円滑に稼働させて、自分の死後も金一族支配を揺ぎないものとする
ことにあったはずだ（唯一領導体系については後述する）。その任務を地位の高い長老、重鎮に
任せるのではなく、実妹をはじめとする最側近に担わせることにしたのである。

その後、金正日は病身をおして各方面の現地視察・指導に金正恩を同伴して、息子の権威付
けと偶像化作業に熱を上げたが、2011年12月にこの世を去った。金正恩への統治システムの
委譲は未完のままであった。ここから最側近と金正恩による「過渡期体制」が始まることにな
る。それは「金正恩による唯一独裁を確立するための集団補佐体制」ともいうべき、出発から
矛盾を内に宿した体制であった。

第二節 独特の唯一独裁体制

古今東西、独裁には様々な形があった。少し前までのビルマ（ミャンマー）のような軍部独
裁もあれば、王家が政治を独占する国もある。開発独裁もある。北朝鮮の独裁はいかなるもの
だろうか？ 北朝鮮は、金日成の思想を国家・社会の唯一の指導思想として絶対化し、全社会
構成員が金日成と金正日の指導だけに絶対服従する「唯一思想体系」「唯一指導体系」をシステ
ム化して、世界に類例のない特異な独裁統治を行ってきた。スターリン式の社会主義一党独裁
の上に、金日成＝首領による絶対統治の仕組みを乗せた二段重ねの独裁体制である。一般的に
「首領絶対制」と呼ばれるもので、これを規律として明文化したものが、1974年に策定された
「党の唯一思想体系確立の10大原則」（以下「10大原則」）だ。これは全国民、全組織の行動規
範として徹底して運用され、憲法、労働党規約をも超越する北朝鮮の最高規律、綱領となっ
たのである。いうなれば、金日成－金正日の絶対独裁を担保する最高位の「掟」であった。法律
でないにもかかわらず、「10大原則」に違反することは罪として罰せられた。「10大原則」は
北朝鮮における政治犯罪の指標となったのである。

長文のため全文を紹介する紙幅がないので、10の条文のタイトルを記しておく。

1. 偉大な首領金日成同志の革命思想で全社会を一色化するために、身を捧げて闘争しな
ければならない。
2. 偉大な首領金日成同志を忠誠をもって高く仰ぎ奉らなければならない。
3. 偉大な首領金日成同志の権威を絶対化しなければならない。
4. 偉大な首領金日成同志の革命思想を信念とし、首領様の教示を信条としなければならない。
5. 偉大な首領金日成同志の教示を執行するにあたり、無条件性の原則を徹底して守らな
け

ればならない。

6. 偉大な首領金日成同志を中心とする全党の思想意志的統一と革命的団結を強化しなければならぬ。
7. 偉大な首領金日成同志に学び、共産主義的風貌と革命的事業方法、人民的事業作風を身に付けなければならぬ。
8. 偉大な首領金日成同志が授けてくださった政治的生命を貴重を受け止め、首領様の大きな政治的信任和配慮に対し、高い政治的自覚と技術で忠誠によって応えなければならぬ。
9. 偉大な首領金日成同志の唯一的領導のもとに、全党、全国、全軍が一貫して動く、強固な組織規律を築かなければならぬ。
10. 偉大な首領金日成同志が開拓された革命偉業を、代を継いで最後まで継承し完成させなければならぬ。

「10大原則」は、要するに、金日成の思想と領導に全黨員、全国民が絶対忠誠、絶対服従することを求める綱領である。金正日の名前は出て来ないが、第10条中に「党中央」の呼称で次のように登場する。

「首領様の領導のもと、党中央の唯一的指導体系を確固として打ち立てなければならぬ」

「党中央の唯一的指導体系と食い違う些細な現象と要素に対しても、黙過することなく非妥協的に闘争しなければならぬ」

「自身のみならず、家族全員と後代までが偉大な首領様を仰ぎ奉り、首領様に忠誠を果たし、党中央の唯一的指導に限りなく忠実でなければならぬ」

「党中央の權威をあらゆる方面から保障し、党中央を命がけで死守しなければならぬ」

すなわち、首領金日成を絶対化しつつ、首領の「代理人」たる「党中央」＝金正日にも唯一人の指導者として忠誠を尽くせ、というのである。なお、「10大原則」では、金日成のリーダーシップを「領導」、金正日のそれを「指導」と区別している。

この「10大原則」は、縦10センチ×横7センチほどの手のひらに乗るサイズの冊子として全労働黨員に配られ暗唱が強いられた。北朝鮮では、職場や学校で週一度「生活総和」と呼ば

れる行動反省会が開かれるが、この際に「10大原則」に則って自分の不十分点を自己批判する。「首領絶対制」とも呼ばれる北朝鮮の特異な独裁統治は、このような綱領をもとに70年代からシステム化が図られた。そして、この「10大原則」に反すると超法規的に処罰された。つまり政治犯になったのである。

2013年6月、金正恩のための新しい綱領「党の唯一的領導体系確立の10大原則」（新「10大原則」）が策定された。この新「10大原則」については後述する。

第三節 金正恩の権力継承のポイントは唯一領導体系

2012年4月の金日成生誕記念日（太陽節）は、北朝鮮史上最大の「宴」となった。まだ金正日が死んで100日余りしか経っていなかったが、「集団補佐体制」は、金日成生誕100周年の節目に合わせて、金正恩の「指導者デビュー」のための盛大なイベントを、金正日生前からの計画通りに開催することにした。

数年前から、首都平壤中心部の再開発事業を進めて高層アパートが林立する街並みを突貫工事で作成し、新たに金日成－金正日の巨大銅像を建立、大規模な軍事パレード、花火大会も催した。多くの外国メディアの入国を許可しこの「宴」取材させた。主役であった金正恩は軍事パレードで主席壇に立って異例の演説までしてみせた。すべては、金正恩新体制を内外に披露するためであった。

この「宴」に合わせて開催された第四回労働党代表者会で、金正恩は党第一書記に就任、また最高人民会議では国の最高指導機関である国防委員会の第一委員長に就いた。金正恩は前年末の金正日死去直後に朝鮮人民軍最高司令官になっていたため、北朝鮮の軍・党・国家の最高位に就いたことになる。多くのメディアや専門家は、これをもって金正恩への世襲後継は完成したとしたが、それは正しくない。北朝鮮では軍・党・国家のトップの座に就くことと、絶対権力を掌握することはイコールではない。実際、金正日は金日成の死後三年以上、党と国家のトップに就かなかったが、絶対権力者の立場は微塵も揺るがなかった。先立つ20年間に権力集中作業を重ね、既に「10大原則」に基づく「唯一領導（指導）体系」を確立していたからだ。

一方、金正恩の場合は、2008年夏に金正日が病に倒れた頃から、内々に後継体制作りが始まり、それを公然化、集中させたのは前述した2010年9月の第三回党代表者会以降である。その直前まで国内では、金正恩はその存在自体が徹底して秘密に付されてきた。名前も、年齢も、経歴も、顔も、ほとんどすべての国民にはまったく知らされていなかったのだ。このような状態で、「さあ新しい偉大な領導者の登場だ。忠誠を誓い服従せよ」と公布されただけでは、統治システムが問題なく稼働するはずがない。

北朝鮮国内では2016年2月時点でも国民に知らされていないが、金正恩は1983年1月生まれだとされる。「宴」の時は29歳。実績と言えるものは何もなく、とても国民を納得させる新指導者としての資質を備えているとは言えない。そのため、2012年以降、「集団補佐体制」は

金正恩の偶像化プロパガンダに注力する。全国津々浦々に掲示されていた金正日賛美のスローガンが金正恩のものに掛け替えられ、党の政治宣伝担当者が金正恩の偉大性宣伝の政治学習を全国で展開した。朝鮮中央テレビや労働新聞は、絶え間なく金正恩の現地指導や軍部隊訪問の様子を伝えた。一方で、国民の中には、若くて肥満体の金正恩を侮る空気がはびこっていた。生活難や、政治学習に動員が続くことへの苦痛もあいまって、新体制への反発の声が北朝鮮内部から数多く聞かれた。



写真① 小学校の校舎に掲げられた「敬愛する金正恩将軍ありがとうございます」と書かれたスローガン。2012年11月 平安北道の新義州市 撮影アジアプレス

20代の若者が頂点に座った北朝鮮の新体制は、いったいいかなる統治を目指すことになるのか——民主化に向かうことを予測する者は誰もいなかったが、独裁統治を続けるにせよ、冷戦時代に確立した金正日時代の古いやり方を踏襲するのか、あるいは時代と国際環境の変化に対応した新しい独裁のステージに移行するのか、世界が注目した。結果的に金正恩体制を選んだのは「変わらない」こと——つまり、これまで通り「朝鮮革命を継続して社会主義を堅持する唯一の指導者による絶対独裁」を続けるという道であった。

三大世襲の権力継承の完成とは、独裁システムの脱金正日化→金正恩化を成し遂げることである。つまり、金正日の「唯一領導體系」を金正恩にどのように引き継いでいくのが要諦なのである。しかし、1974年に作られた「10大原則」には、三代目の後継者の登場が想定されていなかった。ゆえに、金正恩の位置づけをどうするのが明らかにならない限り、軍、党、国家のトップポストに就くだけでは絶対権力の継承は未完としか言えないのである。

第二章 肅清の始まり

第一節 金正日死後七カ月に始まった肅清劇

金正日が生前に決めた「集団補佐体制」人事が、死後七か月にして早くも覆されるという事態が発生した。軍総参謀長の李英鎬の突然の解任だ。2012年7月15日に朝鮮中央通信など官営メディアが報じた解任の理由は、短く「健康上の理由」だけであった。

北朝鮮の軍隊は他の社会主義国に多く見られたように「党の軍隊」である。これは労働党中央軍事委員会委員長がトップで、2012年4月に金正恩が就いた。軍隊内の政治指導のトップは軍総政治局長で崔龍海、そして軍事作戦面のトップが総参謀長で、死去前の金正日に抜擢された李英鎬が並み居る先輩軍人を追い抜いて2009年2月に就任していた。金正恩公然登場後の現地指導や行事で、しばしば金正日と金正恩の間に立ち、金正日死後は、金正恩の傍らでまるで保護者のように振舞っていた李英鎬は、軍を代表して金正恩の補佐を任されたものと見られていた。その李がなぜ解任されたのか？ 解任が公表された後、過去の映像や写真から李の姿がどんどん削除されていった。健康問題が本当の理由ならば存在の痕跡を消去する必要はない。生死は未確認だが、除去・肅清されたと考えるべきだろう。解任後の混乱がまったく外部に伝わってこなかったことから、李英鎬の除去は用意周到で電撃的であったことが窺える。

また、秘密警察=国家安全保衛部のトップであった禹東測^{ウドンチュク}国家安全保衛部第1副部長の消息が2012年4月に途絶え、メディアからも痕跡が消えている。自殺説もあるが詳細は不明。やはり肅清されたのは間違いないだろう。

金正日の遺訓人事が、死後たった七カ月に覆されるという異常は、絶対権力者が死んで権力内のパワーバランスに変化が生じた結果だと思われる。その象徴は張成沢の急台頭であった。

第二節 張成沢の急台頭

李英鎬の解任と同時に北朝鮮権力内で起こっていたのが張成沢の急台頭である。張成沢は、金正日の実妹・金慶姫の夫であり、80年代から金正日の側近として党の要職で活動した。李英鎬肅清時、朝鮮労働党中央委員会委員、党行政部部長、国防委員会委員などのポストに就いていたが、公式序列以上の最大の実力者であった。張成沢は、李英鎬が姿を消した翌月には中国を訪問し、胡錦濤国家主席らと会談。朝中国境の経済特区共同開発など経済協力協定をまとめ上



写真②

げた。若い金正恩の名代だと誰もがみなしていた。

北朝鮮メディアに掲載された写真や映像にも、張成沢の急台頭ははっきり現れていた。筆者はこれらの報道を見た時、張成沢の扱いが特別であるとは感じたが、意見を求めた脱北者は口を揃えて「これまでの北朝鮮の官営メディアでは絶対にありえない写真だ」と語った。いくつか見てみよう。

写真②は2012年11月19日付の朝鮮中央通信から引用したものだ。第534軍部隊直属騎馬中隊の訓練場を視察した金正恩の隣で、張成沢が「威厳ある」ポーズで立っている。この日の他の写真や映像には、金正恩と張成沢が、乗馬場で金慶姫と妹の金ヨジョンと共に馬を駆るシーンが多用されており、あたかも「ロイヤルファミリーが乗馬を楽しむ一日」といった趣向で、張成沢が神聖不可侵の金一族の重鎮であるかのような演出が感じられる。背後には二人を恭しく見守るように幹部たちが整列している。

この写真について、日本在住の脱北者^{ベクチャンリョン}白昌龍は次のように解説する。

「北朝鮮で生まれ、金日成、金正日統治下で育った者には、最高指導者の前でポケットに手を突っ込み（その様に見える）、顔に余裕満々の笑みを浮かべる側近の姿など想像したこともなく、その『不遜な態度』に驚愕した」

写真③は朝鮮中央テレビの映像で、2013年1月28日行われた労働党第四回細胞書記大会の様子だ。金正恩が参席した会議の主席壇と呼ばれる舞台上の席で、張成沢は肘掛にもたれるようにして姿勢を斜めに崩して座っている（写真上）。また張成沢は金正恩の演説中に退屈そうにあらぬ方向を眺めている（写真下）。張の「不遜な態度」は、甥である金正恩に対する油断、侮りから出てしまったものだろうか。

写真④は2013年4月15日の金日成生誕日に楽団の演奏観覧を伝える労働新聞の記事から引用したものだ。これも張と金正恩が「並び立つ」ことを印象付ける強烈な写真だ。右前列にいる金慶姫と崔龍海をはじめ会場の全員が、まるで二人を称えて拍手を送っているように見える。

再び脱北者の白昌龍の解説を記しておこう。



写真③



写真④

「張成沢の『傲岸な』姿が北朝鮮国民や海外メディアの目に触れたことは、金正恩にとっては不利益となったはずだ。ただ最高指導者の権威付けのためだけに利用されてきた官営メディアで、金正恩に並び立つような態度の叔父がたびたび露出することは、自身の偶像化を遅らせるばかりか、あたかも『保護者がいる』というような指導力不足のイメージを抱かせるに十分だったからだ。ただでさえ『若造』と陰口を叩かれているのに、メディアがその『証左』を提供したことになる」

北朝鮮のメディアでは、発表前に数度にわたり厳重な検閲が入る。党や最高指導者の権威にマイナスとなる記事や写真がないかを細かく見るのだが、張成沢の突出ぶりが問題にもならず、公に露出したことは、金正恩と並び立つ張成沢の姿があえて際立つよう、張成沢本人とその側近たちが、権力を誇示する目的で官営メディアに強い影響力を行使していたと見るのが妥当だろう。

だが、あたかも領導者と肩を並べる、あるいは凌駕しているかのような印象を与えた写真は、金正恩に対する「不敬」、「不遜」の象徴として扱われたようである。2013年12月、北朝鮮当局は張成沢の粛清に当たって、「国家安全保衛部の特別軍事裁判に関する報道」を発表し、張成沢粛清にいたる経緯と理由を公開した。この報道は次のように指摘している。

「張成沢は、敬愛する金正恩元帥様の現地指導にしばしば随行するようになったことを悪用して、自分がいつも元帥様の近くにいながら革命の首脳部と肩を並べられる特別な存在であるということを国内外に示して自分に対する幻想を生じさせようと企んだ」

金正日亡き後に急台頭した張成沢は、自分の力をメディアを通じて顕示しようとしたが、それが「指導者並び立たず」を大原則とする唯一独裁体制に挑戦しようとした証拠とされたのだった。

第三節 張成沢の利権拡大

北朝鮮の最大の外貨獲得源は、石炭や鉄鉱石など天然資源の中国への輸出である。それは2011年～13年の期間、輸出額のおよそ七割を占めるが、党や軍、警察機関、有力者などが傘下に貿易会社を作って中国企業と取引してきた。その配分は「ワク」と呼ばれかつては金正日が決めてきた。例えば、軍系のA社に5%、B社3%、労働党宣伝扇動部傘下のC社が3%、軽工業部傘下のD社が3%、といった具合である。80～90年代、日本から大量に輸入された中古車が中国などに転売されていたが、その配分も、また外国に北朝鮮人労働者を派遣する事業の配分も、海産物の輸出配分も「ワク」である。ちなみにこの「ワク」という語は日本語から来たものとのことだ。

金正日死亡で「ワク」の配分は一変することになる。取材で中国の遼寧省の瀋陽や丹東を訪れた筆者に見えたのは、やけに羽振りのいい張派と目される貿易会社の幹部たちの姿であった。丹東で北朝鮮との貿易に携わっている中国人の取材協力者は、当時次のように語っている。

「今、朝鮮で一番力があるのは言うまでもなく張成沢。平壤から出国して来る商社マンたちのメンツはそんなに変わっていないが、『ボスが軍隊から党行政部に変わった』という会社が多い」。党行政部は張成沢が部長を務めていた。

中国人の取材協力者が2013年に密かに録音した、北朝鮮の商社員たちとの昼食会の音声を聞かせてもらった。さりげなく最新の権力構造や利権について尋ねる協力者に、商社員たちは「張成沢同志と金慶姫同志が正恩同志を支えている」「將軍様（金正日）が死んだ後、石炭を握ったのは張成沢同志だ」と答えていた。

北朝鮮内部の取材協力者で、権力中枢の情報に詳しい男性は、中央党の幹部から聞いた話として2013年1月に筆者に次のように話した。

「最終的な決済のサインは金正恩がしているが、実際に下から上がってくる重要案件のほとんどは、まず張成沢が目を通してのことだ」。

先の中国人協力者自身は、規模の大きい石炭ビジネスには関わっていなかったが、中国企業が衣料品や小物を北朝鮮に委託加工する仲介を長くやっており、多くの北朝鮮商社員が「仕事をくれ」と営業に来る。営業には地方政府の役人や平壤の党機関から送られて来た人たちもいたが、異口同音「今は張成沢同志の時代だ」と憚ることなく語ったという。

これらの証言が正しいとすると、張成沢はどうやって「ワク」を手中に収めたのだろうか。一つには生前の金正日が、若い金正恩の補佐を命じる中で「ワク」の仕切りを張成沢に託したことが考えられる。そしてもう一つは、張が力で奪取した可能性だ。

第四節 金正恩「労作」のお墨付き

2012年4月27日、金正恩は党、国家経済機関、勤労団体の幹部たちを集めて重要な談話を行った。それは「社会主義強盛大国建設の要求に合うよう国土管理事業で革命的転換をもたらすことについて」という題目で、5月8日に「労作」として発表された。「労作」とは指導者が直接出したテーゼや重要方針の演説や談話、論文などを指す。この時の「労作」で金正恩は、金日成と金正日の遺体が安置されている錦繡山太陽宮殿を聖地として立派に作ること、平壤の夜景を美しくすることや山林保護、大気汚染防止などを長々と訴えつつ、資源輸出に関する次のような重要な方針を提示した。

「国の地下資源を大切に積極保護しなければなりません。今、はした金の外貨を儲けようと、国の貴重な地下資源をでたらめに開発して輸出しようとするのは、遠い先々を見ずに、目の前のことだけを見る近視眼的態度で愛国心がない表現です。国の地下資源開発を国家資源開発省と非常設地下資源開発委員会で検討承認する体系を厳格に立てて、地下資源をでたらめに開発するとか地下資源開発に無秩序が作られないようにしなければなりません」。 (5月8日朝鮮中央通信が報道)

言うまでもなく地下資源の国家管理を強調した内容だ。北朝鮮では多くの国営の炭鉱や鉬山

が90年代から経済難で稼働が停滞し、代わりに金を持つ個人が賄賂を使って組織の看板を借りて運営する小規模の鉱山が雨後の筍のように乱立、無秩序開発を行っていた。金正恩が「労作」で国家の統制を命じたのは、このような乱開発を止める目的もあったのだろう。また研究者には、この「労作」を各組織に分断された経済利権を内閣に戻す「経済正常化」の一環だとする見方もあった。だが筆者は、この「労作」の重要点は「ワク」にあったと見ている。

まだ金正日が世を去って四か月。政治、経済の右も左もわかっていないであろう29歳の金正恩が、独自にこのような方針を出せるとは考えにくい。金正日が生前に命じたものか、背後にいる者が提議したものだと思えるのが自然だ。「労作」発表後に「ワク」がどんどん張成沢系列に移行したことを考えると、天然資源利権、とくに石炭輸出利権を、他の勢力から奪取するために、新指導者から発せられる「労作」の権威を利用したものと筆者は推測する。「労作」に忠実でない者は政治犯罪者の烙印を押されかねない。それくらい重いのだ。

貿易統計を見ると、「労作」が出された後も中国への石炭輸出は、抑制されるどころか金額も数量も増えている（表1）。張成沢は、多くの貿易会社が天然資源を輸出している現状を、金正恩の名で「無秩序開発を止め国家に一元化せよ」と指示を出させて「ワク」決定の主導権を握り、他組織の対中国貿易の利権を奪い、一方で引き続き石炭輸出を拡大させたのではないか。

ここにも、金正日の死後に権力内のパワーバランスが変化したことによって生じた「利権の移動」を見て取ることができる。

表1

2010年	3億9018.9万ドル	460万2697トン
2011年	11億3762.5万ドル	1104万6731トン
2012年	12億0567.6万ドル	1180万1695トン
2013年	13億8442.8万ドル	1648万0986トン

（北朝鮮の無煙炭の対中国輸出 典拠GTA）

※2014年は韓国貿易協会の統計によると中国への石炭輸出額は11億3218万ドルで、前年比で17.6%減少した。石炭価格の下落、環境対策のための中国の石炭離れ、朝中関係の悪化などが原因と考えられる。

北朝鮮の政治経済事情に詳しい脱北科学者の^{ハンジョンシク}韓正植氏は、金正日時代の政策の立案と決定の手順はトップダウン式よりもボトムアップ式が多かったと、2007年の筆者のインタビューで述べている。膨大な仕事のすべてに最初から金正日に関わるなど不可能なので、各組織の幹部たちが下から政策の「提議書」を上げ、金正日とその採否を決めサインする。OKとなればそれは〈批准〉と呼ばれ、決定は絶対服従の〈方針〉として下達される。最終決裁の〈批准〉の権限は金正日だけが持つものだ。これが「唯一領導体系」の要である。

おそらく、この方式は金正恩体制出帆後も踏襲されただろう。しかし、国際関係も経済も党務も人事も知らない金正恩には、判断がつかないことだらけだったはずだ。そこに、利権や勢

力の拡大を目論む側近や実力者たちが介入する余地が生じる。金正恩のOKサインをもらえばいいのだから、自分は金正恩に取り入り、足を引っ張りたい者を金正恩から遠ざける。補佐、後見役として金正恩の傍に立った張成沢は、自己の権力と利権を拡大させる大きなチャンスを得た。

北朝鮮の軍隊は部隊装備の補充・更新や、兵士たちの消耗品を国家からまともに供給されなくなって久しく、90年代から「自体解決」（自力解決）を求められてきた。石炭輸出利権は、幹部たちの懐を潤わせるだけではなく、それらの財源にもなっており、利権を侵食する張成沢に対する反発が激しかったことが推測できる。北朝鮮当局が公表した張成沢粛清の理由（後述する）の一つに、石炭をはじめ貴重な地下資源をむやみに売り払ったことが挙げられている。これも短期間に石炭輸出利権が張成沢に移動したことを示すものと言える。絶対独裁者・金正日の死によって「重石」がなくなり、実力者間の利権争いが繰り広げられていたことを想像させる。

第三章 金正恩の新「10大原則」と粛清

第一節 新「10大原則」の策定

40年近く最高規律として運用された旧「10大原則」は、金正日の死をもって宙に浮くことになった。なぜならこの世にいない金日成と金正日が国を指導することはできないからである。また、そこには三代目の指導者が想定されておらず、当然、金正恩の位置づけは記されていない。つまり、旧「10大原則」は期限が切れたのであった。

体制発足から一年半が経った2013年6月、金正恩は「党の唯一的領導体系確立の10大原則」を内々に公表した（新「10大原則」）。しかし、官営メディアには一切掲載されていない。露骨に絶対忠誠を求める「掟」の存在を外国に知られることを憚ったのではないか。筆者は2014年に北朝鮮内部の取材協力者から実物を入手した。その条文のタイトルを紹介する。

※（ ）内は筆者追記

- 1 全社会を金日成－金正日主義化するために、身を捧げて闘争しなければならない。
- 2 偉大な金日成同志と金正日同志を、わが党と人民の永遠の首領として、主体の太陽として高く仰ぎ奉らなければならない。
- 3 偉大な金日成同志と金正日同志の権威、党の権威を絶対化し、決死擁衛（擁護）しなければならない。

- 4 偉大な金日成同志と金正日同志の革命思想と、その具現である党の路線と政策で徹底的に武装しなければならない。
- 5 偉大な金日成同志と金正日同志の遺訓、党の路線と方針貫徹において、無条件性の原則を徹底して守らなければならない。
- 6 領導者を中心とする全党の思想意志的統一と革命的団結をあらゆる面で強化しなければならない。
- 7 偉大な金日成同志と金正日同志に学び、高尚な精神道徳的風貌と革命的事業方法、人民的事業作風を身に付けなければならない。
- 8 党と首領が授けてくださった政治的生命を貴重に受け止め、党の信任と配慮に対し、高い政治的自覚と事業実績で応えなければならない。
- 9 党の唯一的領導のもとに、全党、全国家、全軍が一つになって動く、強固な組織規律を築かなければならない。
- 10 偉大な金日成同志が開拓され、金日成同志と金正日同志が導いてこられた主体革命事業、先軍革命事業を代を継いで最後まで継承し完成させなければならない。

後文

全ての幹部（活動家）と党员、勤労者は、党の唯一的領導体系を徹底して築き、偉大な金日成同志と金正日同志を、わが党と人民の永遠の首領として高く敬い、党の領導に従って、自



写真⑤ 新「10大原則」の現物

主の道、先軍の道、社会主義の道へと力強く歩いていくことで、白頭^{ベクトゥ}で開拓された主体革命偉業、先軍革命偉業を最後まで完成させなければならない。

条文の中に金正恩の名はなく「党」「領導者」と表わされている。内容を一言で言うと、金日成－金正日の教えに従って、金正恩（党）の権威と指導を絶対、無条件に受け入れよというものだ。唯一領導體系の確立とは、要するに、党・軍・国の機関、そして幹部はじめ国民に、金正恩への絶対服従、絶対忠誠を誓わせるシステム構築のことである。

この新「10大原則」の策定以降、金正恩体制は全国で軍や党、公安機関の検閲を一気に進め、秩序違反者の逮捕と処刑を繰り返した。粛清劇が最高潮に達したのが、策定から半年後の張成沢の処刑であった。

第二節 張成沢の粛清

張成沢の粛清の理由とされたのは「唯一的領導體系違反」であった。金正恩を差し置いて分派を作り「国家転覆」を図ろうとした、とされたのである。

党の政治局拡大会議での処分決定は、張成沢が、「反党反革命宗派（分派）」活動をしていた事例を挙げて糾弾し、「党の唯一的領導體系に違反した」として党から追放除名した。続いて張成沢は裁判かけられた。国家安全保衛部特別軍事裁判である。この裁判では張成沢を、「国家転覆陰謀」、つまりクーデターを図ろうとしたと断罪、刑法第60条に基づいて最高刑の死刑に処すとした。つまり党による除名と、国家による処刑の二段階の粛清であった。処刑は形式的には刑法犯として執行された。

北朝鮮当局は、労働新聞などの官営メディアを通じて、張成沢の粛清・処刑を決定した経緯と理由を公開している。一つは2013年12月9日付の「朝鮮労働党中央委員会政治局拡大会議に関する報道」（以下〈拡大会議報道〉）。二つ目は同月13日付の「国家安全保衛部の特別軍事裁判に関する報道」（以下〈軍事裁判報道〉）である。

その事例を抜粋整理して、北朝鮮当局の主張する張成沢粛清の理由を分析してみたい。

①分派を形成、勢力を拡大しようとした。

「張成沢は、党の唯一的領導を拒否する重大事件を発生させて追い出された側近とおべっか屋を巧妙な方法で数年間に自分の部署と傘下単位に登用し、前科者、経歴に問題がある者、不平・不満を抱いた者を系統的に自分の周りに糾合しては、その上に神聖不可侵の存在として君臨した。奴は、部署と傘下単位の機関を大々的に増やし、国の全般事業を掌握して省、中央機関に深く手を伸ばそうと策動し、自分の部署を誰も侵せない『小王国』に作り上げた」（〈軍事裁判報道〉）。

②金日成－金正日－金正恩に対する不敬、自己の偶像化。

「大同江タイル工場に偉大な大元帥様たちのモザイク壁画と現地指導業績碑を建立することを阻んだばかりか、敬愛する金正恩元帥が朝鮮人民内務軍の軍部隊に送った親筆書簡を天然花崗岩に刻んで部隊の指揮部庁舎の前に丁寧に建てようという将兵の一致した意見を黙殺したあげく、やむを得ず陰の片隅に建立するように押し付ける妄動を振るった」〈軍事裁判報道〉。

「張成沢は敬愛なる元帥様（金正恩のこと＝筆者）の現地指導にしばしば随行するようになったことを悪用し、奴がいつも元帥様近くにいるが革命の首脳部と肩を並べる特別な存在というのを内外に見せ、奴に対する幻想を作りあげようと企んだ」〈軍事裁判報道〉。

③石炭利権を横領して財政に打撃を与えた。

「張成沢は、石炭をはじめ貴重な地下資源をむやみに売り払うようにして、腹心が仲買人に騙されて多くの借金をするようにし、去る5月にその借金を返済するとして羅先^{ラソン}経済貿易地帯の土地を50年の期限で外国に売ってしまう売国行為もためらわなかった」〈軍事裁判報道〉。

④失政の責任。

「国家財政管理体系を混乱に陥れ、国の貴重な資源を安値で売り払う売国行為^{チュチュエ}を働いて主体鉄と主体肥料、主体ピナロン工業を発展させるべきだという偉大な首領様と將軍様の遺訓を貫徹できなくした」〈拡大会議報道〉。

※外国に依存することなく、北朝鮮に豊富な石炭エネルギーと原料、自前の技術と労働力で、産業を発展させるという金日成が提唱して始まった「チュチュエ産業」が、ことごとく失敗に帰していたことを告白しているが、張成沢が外貨稼ぎのために地下資源（石炭）を中国に輸出したことがその原因だとしている。

情報鎖国・北朝鮮で起こる大事件は不明なことばかりである。筆者なりの張成沢粛清の経緯を推測してみたい。

まず粛清劇の背景には石炭利権をめぐる暗闘があったと考える。利権を取り戻すためには闘わなくてはならないが、超大物の張成沢を相手に下手な喧嘩をすれば逆に潰されてしまう。また最終決済権者の金正恩が同意しない限り張成沢を誰も切れない。張成沢に対抗するためには、まず金正恩と張成沢を離間させることが必須であった。張成沢の突出に反発し、利権奪還を図る者たちは、張成沢の問題点を調べ上げて秘密裏に金正恩に報告したのではないか。

そして2013年6月の新「10大原則」の策定を機に、張成沢の多くの行動は「唯一的領導體系違反」であるとし、「反党反革命宗派」という最悪の政治犯罪事件に仕立て上げた。利権奪還を図る者たちは、幹部たちの「唯一的領導體系違反」を監督する党組織指導部と、情報機関の保衛部と組み、張成沢の行状を放置すると「唯一的領導體系」の構築は困難だとして張成沢粛

清を金正恩に建議し、裁可を受けて実行した—これが筆者の見立てである。

張成沢は、北朝鮮当局が公式発表したように金正恩に挑戦して国家転覆を陰謀したのではなく、甥であり未熟な金正恩を「操り人形」にしようとして失敗したのではないだろうか。

第三節 続く粛清

張成沢粛清後も、北朝鮮権力中枢では党幹部の粛清が続いた。まず張成沢の親族、関係の深かった者が連座して続々粛清された。2014年10月には、労働党中央の課長級を含む幹部10余人が、平壤市郊外の^{カンゴン}姜健軍官学校の訓練場で銃殺された。この情報は、アジアプレスが独自に北朝鮮内部で取材して入手し記事化した^{カンゴン}が、後に韓国国会の情報委員会で、情報機関の国家情報院がほぼ同様の内容の粛清があったことを報告している。その報告の中で、銃殺刑は、中央党、保安部（警察）、保衛部、司法機関の幹部が集められた前で「半公開」で執行されたとされている。各組織の幹部たちに対する「見せしめ」であったと思われる。

2015年も粛清の嵐は止まらなかった。5月13日に韓国国家情報院が公開した人民武力部長の^{ヒョヨンチョル}玄永哲の処刑情報は世界を驚かせた。人民武力部長は、防衛大臣、国防大臣にあたる。この処刑情報では「玄永哲処刑は金正恩への不服従のため。銃殺には高射機関銃が使われたという諜報がある」とされた。

玄永哲は粛清される前月にロシアを訪問している。5月にモスクワで開催される対ドイツ戦勝記念式典に金正恩が参加するための準備の派遣だと見られていた。とすると、玄永哲の粛清はいかにも即興的、衝動的に映る。しかも現職の人民武力部長だ。この唐突な粛清の理由は何だったのだろうか？ 粛清の裁可を下せるのは「唯一の領導者」金正恩しかいないことを考えると、金正恩の個人的感情、性格に因ると考える他、説明するのが困難である。

第四章 粛清を推理する

「唯一的領導体系の確立」とは、党・軍・国の機関、そして幹部はじめ全国民に、金正恩への絶対服従、絶対忠誠を誓わせるシステム作りのことであることは述べた。これは、先に挙げた新「10大原則」を通達、学習させるといった啓蒙だけでは実現できない。違反者に対する処罰があって初めて、それは「掟」としての機能を果たすのである。張成沢という近親者、実力者といえども、唯一領導体系に違反している状態を見過ごすとシステムは瓦解しかねない。新「10大原則」が策定されて以降、幹部と権力機関の綱紀粛正、不服従者と忠誠希薄者に対する見せしめの懲罰が実行されたが、その仕上げとして張成沢までが標的になった。その背景には、述べて来たとおりの利権争いの影が見えるのである。

金正恩の執政四年間の荒々しい粛清劇を振り返って、その経緯を筆者なりの推測を整理して筆をおきたい。何分、情報接触の困難な北朝鮮の最深部で起こっていることであり、確かな証

拋が示せないことお許しいただきたい。

- 金正日の死亡で北朝鮮権力内の勢力均衡が崩れ、急速に浮上した張成沢は金正恩の「操り人形化」を試み、対中貿易利権を奪取、遺訓人事の無力化を進行させた。
- 一方、張成沢は権力内で大きな反発も引きおこし、反張成沢派は張成沢と金正恩を離間させ、新「10大原則」を張成沢打倒の道具として使った。
- 金正恩は張成沢系列の人々の粛清を大々的に継続すると共に、自身の未熟さと権力掌握の不完全さを打開するため、「唯一的領導体系」を徹底的に貫徹することにし、不服従者と忠誠希薄者に対する見せしめの懲罰＝「従わない者は容赦しない」を断行し続けている。
- 高位級の幹部、側近までもが残忍な形で粛清されているのは、金正恩の衝動的行動による。

(文中の敬称は略した)

参考文献

労働新聞

朝鮮中央通信

「北朝鮮首領制の形成と変容—金日成、金正日から金正恩へ」鐸木昌之（2014年2月 明石書店）

「北朝鮮内部映像・文書資料集～金正恩の新『十大原則』策定・普及と張成沢粛清」石丸次郎編（2014年12月 アジアプレス出版）

北朝鮮内部からの通信・リムジンガン7号（2015年4月 アジアプレス出版）